

『浮世風呂』における「ぜ」「ぞ」をめぐる問題

——江戸語研究の「常識」と「誤解」——

神戸和昭

序

学問の世界でも、誤解が誤解のままいつまでも訂正されることなく放置され伝承され続けることは決して珍しいことではない。思い込みとはまことに怖いもので、それが「常識」とされていることであれば、なおさら誰もわざわざ念のため確認しようなどとも思わないのであろう。しかし、我々がしばしば経験するように、往々にして「常識」は「真実」とは異なるものである。

本稿は、江戸語研究の世界で基本的な「常識」事とされている重大な「誤解」について、そのよって来るところを辿ってみたささやかな報告である。具体的な題材として、今回は『浮世風呂』における「ぜ」「ぞ」をめぐる問題について取り上げようと思う。問題の性質上、細かな仮名表記が分析対象となるため、実例中のルビについては一律に本行中に「」で囲んで示すことにする。

一 『浮世風呂』における「常識」

式亭三馬の滑稽本『浮世風呂』四編九冊（文化六〜一〇年へ一八〇九〜一三）刊）は、銭湯という江戸の市井における一種の社

交場を舞台に、そこに集う各階層にわたる老若男女多数の日常会話を余すところなく活写している。ために江戸語の宝庫とも称され、江戸語資料として夙に高い評価を得ているところである。とりわけ、神戸（一九九三）などによって検証されているように、その音声面に関する写実性は（仮名表記レベルでのさまざまな工夫によって書き分けられる限りにおいてであるが）他の側面以上に信頼度が高いと目される。

今、右で「仮名表記レベルでのさまざまな工夫」と述べたが、まさにこの事こそ、本稿で取り上げようとする問題の大きな背景をなすものである。

ここで、特定の文献の記述を組上に載せあれこれあげつらつても意味がないので、それに代わり、『浮世風呂』における仮名表記レベルでのさまざまな工夫に関する基本的「常識」を、全くわたくしに綴ってみたものが左の文章である。

『浮世風呂』の資料性を高めている理由の第一は、他に類を見ぬほどに精緻なその会話描写にある。三馬は当時の話し言葉の微細な特徴の違いを克明に写し分けるために表記上種々の工夫をこらした。具体的には、仮名二字を「ふわ（は）」

「ふを」「しゑ」のように組み合わせ用いたり、仮名の右肩に特別な符号「白圈しろまじり」や「。」を付したりなどした。「。」は「ざ」「ぜ」「ぞ」のようにサ行の仮名に対して用いられ、頭子音[s]が破擦音化して[ts]となったツヅツヅを表そうとした、云々。

傍線を引いた部分が、これから直接検討していこうとしている「常識」の具体的中身である。

二 「常識」の淵源

『浮世風呂』における「ざ」「ぜ」「ぞ」に関する右のような「常識」を生んだその淵源は、管見の限り、中村（通）（一九五七）の『浮世風呂』解説中に見える次のような指摘に求められる。

文字に対する関心を示している三馬は、当時のかなでは十分に表記することのできなかつた音に対して、特別の記号を用いている。〈中略〉ざは[sa]の音を示したもので〈中略〉これと同種の「ぜ」「ぞ」についても、「小〔ちつ〕ぜへ」謎「なぞ」解の名人」などの表記がみられる。（37頁）

幾分ばやかした書き方のようにも思われるが、これを素直に読めば、『浮世風呂』では「ぜ」「ぞ」も[s]を頭子音とするツヅツを表すべくざと同様に用いられていたと解するのが自然である。

中村（前掲）は、江戸東京語研究の第一人者によるきわめて良

心的な校訂態度と国語学的知見にとむ解説・頭注とが相まち、以後江戸語研究上不可欠の基本テキストとしての地位を築いた。^①結果的に、その影響力も甚大で、『浮世風呂』に関する「常識」が醸成される母胎となったのも無理からぬことであった。

三 『浮世風呂』における実態

では、「ざ」「ぜ」「ぞ」表記が『浮世風呂』で実際どのように使われているか確認してみよう。

まず「ざ」については、例えば

おとつざん（63頁10行他）

飛八「とびはつ」ざん（246頁8行他）

のように、江戸語において促音直後のつの頭子音が破擦音化してツとなる音変化を起こしたことを明示するための特殊な仮名表記として用いられている。これに関してはたしかに「常識」とおりで、特に問題ない。^③

しかし、「ぜ」については、『浮世風呂』における存在そのものが確認されない（『浮世床』にも見えない）。

「ぞ」は、『浮世風呂』前編巻之下に中村の示すとおり

謎解「なぞとき」の名人「めいじん」（95頁14行）

の例が見え、^④ 版本（初版本・再補刻本）によってもその存在自体

は確認されるもの、具体的な使用場面を見てみると、ここは

そんなら謎「なぞ」をかけべいか。〈中略〉其心「そのこ、ろ」はあんだんべ。むかでかなはぬと解「とい」たりけり。

〈中略〉コリヤ又弁慶「べんけへ」は日本一「につぼんいち」の謎解「なぞとき」の名人「めいじん」だと、よろこびいさんで八島「やしま」の浦「うら」へ着「つき」にけり。(95頁)

のように、座頭が田舎詞を以て語る「仙台浄瑠璃」中での使用例であつて、通常の江戸語音を写したのではない(そもそも田舎詞の特殊性から、これを単純に[sɔ]を写そうとしたものかどうかも実は即断できない)。

四 江戸語におけるツオ

ツオの問題に関して言えば、湯澤(一九五七)が

現在では往々「御馳走」を「ゴツツォー」という者があるので、「ツォtsɔ」の音を聞き得るが、江戸の作物にはまだ「ツォ」に接し得ない。(22頁)

と強く断じており、湯澤の実見した限りにおいてツオの存在を積極的に示すような証は見られなかったことが分かる。

周知のように、湯澤(前掲)は江戸戯作類を中心に広範な文献

を博搜精査した江戸語研究の金字塔とも呼び得る一大労作であり、その湯澤の記述から、一般の江戸語においてツオそのものが基本的にまず現れなかった可能性が高い。たとえ現れたとしても非常に特殊な例であろう。

五 「ぜ」の実例

ここで「ぜ」に話題を戻すと、前述のとおり『浮世風呂』にその実在が確認できない「小「ちつ」ぜへ」であるが、実は湯澤(前掲)が「ぜ」の実例としてただ一例だけ挙げた、式亭三馬の滑稽本『素人狂言紋切形』(文化二年(一八一四)刊)中の

形「なり」は小「ちつ」ぜへが。今年「ことし」取「とつ」て八十九になりやす。(早稲田大学図書館蔵本)初編上25丁オ4行)

に、まさしくその存在を見出すのである。⁸⁾しかも、この「ぜ」は先の「ぞ」の場合とは異なり、明らかに江戸者の使用例である。

ここで縷々証を挙げることは控えるが、中村が湯澤のこの記述(一九五四年刊の初版本「湯澤一九五四」も全く同文である)を参看していたことは間違いないので、恐らくそこで得られた情報が錯綜して『浮世風呂』の解説中に混入してしまったというのが真相であろう。

六 「ぜ」の音価と江戸語における^{ツヅ}

だが、さらに問題なのは、三馬がわずかではあっても江戸語描写中に実際に使用していることが確認された「ぜ」の音価自体である。

湯澤（前掲）は『素人狂言紋切形』の「小〔ちつ〕ぜへ」について

この「ぜへ」は「ざん」から推して考えると、「ツエー」の音を表わすものかとも思われるが、恐らく「チャ、チュ、チヨ」の子音に「エー」の付いた「チエー」を写そうとしたもので、次の例の「チエ、」も同様の音を表わすものと考えられる。（22頁）

として、南仙笑楚満人の洒落本『くるわの茶番』（文化一二年（一八一五）序）の

チエ、たばかられしかざんねんや。（水野一九八六267頁上9行）
をその例証として挙げる。¹⁰

他方、沼本（一九九〇）も『素人狂言紋切形』における当該例の表記を取り上げ、近世唐音資料における用法を根拠とする全く異なるアプローチから

この「ぜ」は、『慈悲水懺法』等によって、^{tse}でなく^{tsɛ}を表したものと解される（12頁「注30」）

と、やはり湯澤と同じ結論に達している。¹¹

とすれば、「ぜ」は^{tsɛ}ではなく、むしろ^{tsɛ}を表していることと見るべきだということになる。控えめに言っても、「ぜ」^{tsɛ}なる短絡的な図式は掲げられないということである。仮に^{tsɛ}が現れることがあったにしても、その出現頻度は^{tsɛ}に比べると^{tsɛ}でもなく頗る低く、到底両者を同列には扱えないだろう。

結

こう見てくると、『浮世風呂』に唯の一例だけ見える「ぞ」（ただし仙台浄瑠璃中）および、『浮世風呂』には一切見えず、今までのところ三馬の他作品『素人狂言紋切形』『七癖上戸』¹²に各一例ずつのみ確認される「ぜ」（ただし後者は生酔の田舎詞中）を、従来のようにそれぞれ^{tsɛ}を表しているとは単純に決めつけることはとても出来ない。またそこから派生して、少なくとも文化期（一八〇四～一八）頃における一般の江戸語で「ツア行音」として通常現れるのは、結局のところ基本的にア段の^{tsɛ}のみということになる。エ段・オ段の^{tsɛ}はたとえ現れたとしても、それは極めて稀な例であろう。

以上の検討の結果によって、『浮世風呂』における「ぜ」「ぞ」、および必然的にそれに伴う（文化期）江戸語の音韻状況に関する誤った「常識」「伝説」の類がすみやかに訂されることを切に望

んで、この小考を終えることとする。

【注】

(1) 本書に対する、近世文学研究における一代の碩学・中村幸彦による辛口の書評「中村(幸)一九五七」でも、「文字遣いに神経質な三馬の作品だけに従来へ中略」なお手ぬかりのあった翻刻態度も厳密で、余程の事でない限り、原本なしで済ませるようになったのは文学語学の両方の資料であるだけに喜ばしい」(108頁)と、その基本的テキストとしての信頼性について非常に高く評価されている。実際、その後同じ岩波書店の「新大系」シリーズにも『浮世風呂』が入り、むしろその間の研究の進展ぶりを反映し優れた点は多々あるものの、少なくとも国語学徒の間では、未だにこの「旧大系」本も現役として研究の第一線で用いられ続けているという事実が、そのことを如実に物語っている。

(2) 『浮世風呂』の用例の所在表示に際しては、煩を厭うてそのテキスト名「中村(通)一九五七」は一切省略に従う(以下同)。
(3) ちなみに、小松(一九八五)47頁には、すでに明和期(一七六四〜七二)の江戸洒落本中に¹⁷⁾をを表す「ざ」が見えることが報告されている。

(4) 小松(一九八五)48頁。

(5) 当該箇所を掲げておくと、初版本(神保一九七八年使用)は「前編下20丁ウ6行」、文政三年(一八二〇)再補刻本は東北大学附属図書館狩野文庫蔵本では「前編下20丁ウ6行」早稲田大学図書館蔵本では前編卷之下が二分冊化され「前編下

ノ二4丁ウ6行」。

(6) 例えば、小松(二〇〇六)38〜39頁。

(7) 湯澤(一九五七)22頁。

(8) なお、湯澤や中村より後のことになるが、棚橋(一九九四)191頁には、三馬の滑稽本『七癖上戸』(文化七年へ一八一〇)刊中に「ぜ」が見えることが報告されている。具体的には「ちつぜえ妹「いもうと」めエ」(棚橋一九九二159頁1行)というものだが、『素人狂言紋切形』の場合と(漢字書き部分の有無は別として)実質的に同じ「ちつぜへへ」であることが注目される。ただし、その使用場面を確認してみると、こちらの方は田舎詞を話す生酔の使用例であって、通常の江戸語音声を書いたものではない。

(9) 中村が湯澤(一九五四)に関する書評「中村(通)一九五四」をものしている、という決定的な事実を一つ挙げるにとどめる。
(10) これを逆に言えば、湯澤の実見した限りにおいて¹⁷⁾の存在を積極的に示すような証は見られなかったということになる。

(11) 沼本(一九九〇)は、この「ぜ」のみならず、江戸戯作中において仮名に「。」を付すという方式の「全体が唐音資料の影響によるものであるとする」(12頁「注31」)。

(12) ¹⁷⁾は江戸語において音変化の結果発生したが、その具体的道筋には、すでに示した、「オトトサン↓オトツツアン」のように¹⁷⁾の頭子音[s] (摩擦音)が促音の直後で破擦音化し[s̥]となつて生じた場合のほか、松村(一九九八)147〜148頁によれば、「コイツワ↓コイツァー」のように「¹⁷⁾+係助詞ワ」が^[su-wa]↓^[sa]と融合化して¹⁷⁾の長音が生じた場合もあり、大きく二つのタイ

プが見られた。

(13) 注8に同じ。

【引用文献】

神戸和昭(一九九三)「近世語資料としての江戸戯作の写実性に
関する一検証」『浮世風呂』における合拗音の表記を中心に―
『語文論叢』21

小松寿雄(一九八五)『江戸時代の国語 江戸語―その形成と階
層―』〈国語学叢書(第一期)7〉東京堂出版

——(二〇〇六)「江戸語研究の歴史」飛田良文編『江戸語
研究―式亭三馬と十返舎一九―』〈国語論究12〉明治書院

神保五彌解説(一九七八)『初版本 譚話浮世風呂 前編』へ上・
下〉新典社

棚橋正博校訂(一九九二)『式亭三馬集』〈叢書江戸文庫20〉国書
刊行会

——(一九九四)『式亭三馬 江戸の戯作者』ぺりかん社

中村通夫(一九五四)「書評」湯澤幸吉郎著『江戸言葉の研究』
『文学』22-7

——校注(一九五七)『浮世風呂』〈日本古典文学大系63〉岩
波書店

中村幸彦(一九五七)「書評」中村通夫校注 日本古典文学大系
『浮世風呂』『文学』25-11

沼本克明(一九九〇)「半濁音符史上に於ける唐音資料の位置」
『国語学』162

松村 明(一九九八)『増補 江戸語東京語の研究』東京堂出版

水野 稔他編(一九八六)『洒落本大成25』中央公論社

湯澤幸吉郎(一九五四)『江戸言葉の研究』明治書院

——(一九五七)『訂江戸言葉の研究』明治書院

(ごうど・かずあき 千葉大学文学部教授)